

専門基礎研究報告書の書き方

Y200999 電子 太郎

指導教員 龍谷 花子 教授

1. はじめに

専門基礎研究では、研究成果を報告書にまとめて発表を行わなければならない。ここでは、報告書の作成要領として、テンプレートファイル（雛形）の使用方法と具体的な書式について説明するとともに、専門基礎研究の履修、報告書の提出と発表会についても解説するが、本文書自体がテンプレートファイルとなっている。

2. 報告書作成要領

2.1 テンプレートファイルの使い方

本テンプレートファイルには「.dotx」という拡張子が付いている（ただし、ファイル表示のオプションにおいて「登録されている拡張子は表示しない」にチェックが付いていると拡張子は表示されないで、必ずチェックは外しておくこと）。これを開くと、別の新しいファイル（*.docx）が作成される。

今ここで開いて見ているのが、その新しいファイルであるが、このファイルには、すでにテンプレートとなる文章などが書かれているので、それに対して加工したり、加筆したりすることができる。

その際には、直接入力してもよいが、すでにWordなど他のアプリケーションで作成した文章があるならば、それを必ずいったん「メモ帳」などのシンプルなエディタにコピーしてから、さらにそれをコピーして貼り付けるようにしてもよい。直接Wordなどからコピーすると、元のファイルの書式ごとコピーされてしまい、テンプレートの意味がなくなるので注意が必要である（エディタにコピーするのは、書式の情報を消すためである）。

テンプレートにある書式を維持するのに、もっとも手っ取り早い方法は、すでにある文章（題目や本文）を書き換えていくというものである。その際、改行マークを消してしまわないことが重要である（改行の部分に書式の情報があるので）。また、項目が不足する場合は、同じ書式の部分をコピーしてから、書き換えをしていけばよい。

テンプレートの書式を用いるもう一つの方法は、面ニューの「スタイル」から、適切な書式を選択するというものである。これが本来のテンプレートの活用方法である。

.dotxというテンプレートを開き、それを保存しようとする（内容をまったく更新していなくても）、別の新しいファイル（.docx）として保存される。その際にはファイル名もデフォルトのものとなる。

たとえば、「専門基礎研究報告書雛形.dotx」というテンプレートだと、「専門基礎研究報告書1a.docx」というファイル名になるが、これはこのままの名前で保存すること。今後この「1a」という部分を改訂や添削などにより変更していくことでバージョンを管理することができる。

2.2 報告書の書式

書式はテンプレートファイルにおいてすでに設定済みであるが、以下のようになっているので、これらが崩れていないか注意を払うこと。

頁：A 4 縦向き、2 頁

余白：上25mm、下25mm、左25mm、右25mm

文字方向：横書き

文字数：標準の文字数

段組：表題部分は1 段、本文は2 段

行間：表題部分は1 行、本文は固定値12pt、節

と節の間の空行は8pt

フォント：本文は明朝系で統一し、題にはゴシック系を用いる

書類名：10ptで左寄せ、ゴシック系

題目：14ptで中央揃え、ゴシック系

学籍番号・氏名：11ptで中央揃え、ゴシック系

指導教員：10.5ptで中央揃え、ゴシック系

節・小節の題目：9ptで左寄せ、ゴシック系

本文：9pt、行頭に1 文字の字下げで両端揃え、明朝系

図表：必要最小限に留めること

図表の題目：9ptで中央揃え（図の題目は図の下に、表の題目は図の上に）、明朝系

図表中のフォント：ゴシック系

参考文献：必要最小限に留めること。書式については指導教員の指示に従う

謝辞：原則として不要

ただし、これらの書式はもっとも文字数が多くなるようにした設定であり、本文の行間を12ptよりも広くしたり、本文のフォントの大きさを10ptあるいは10.5ptに設定したりして読みやすくすることも可能である（フォントを大きくした場合は、それに対応して必ず行間も広くしなければならない）。

3. 専門基礎研究の履修内容

3.1 応用セミナーと専門基礎研究の違い

(1) 応用セミナーのシラバス

各研究室に配属され、「専門基礎研究」を履修する場合にはその内容を補足する学習活動を行い、履修しない場合には4 年次の「特別研究」を実施するのに必要となる準備的な学習を行う。いずれの場合も、年度末に報告書としてまとめ、学習結果を発表しなければならない。「専門基礎研究」を履修する場合は、その報告書と発表に「応用セミナー」の内容を含み、別途の報告書提出は免除するが、「応用セミナー」のみの履修の場合は、学習結果を報告書としてまとめ、発表会において発表を行う。

(2) 専門基礎研究のシラバス

各研究室に配属され、2 年次までに修得した学習内容をもとに基礎的な研究テーマについて研究を進め、「特別研究」を実施するのに必要な専門的な知識を獲得し、関連する分野において自ら問題を解決する能力を身につけられるようにする。これによって、これまでに履修した科目の応用能力を高めるとともに、3 年

次での講義に対しても理解が深められるようにする。担当教員のもとでなされた研究は、年度末に報告書としてまとめ、研究成果を発表会において発表しなければならない。

3.2 専門基礎研究の履修条件

まず、「応用セミナー」の履修については、研究室配属されていることが条件（総修得卒業要件単位数が62単位以上）となっているのに対して、「専門基礎研究」については何も条件が定められてない。つまり、履修規則上は、3年次以上であれば履修可能となっている。しかし、現実的には研究室配属されていない状況での履修は考えられない。

一方、シラバスにおいては、前述のとおり「専門基礎研究」は「「特別研究」を実施するのに必要な専門的な知識を獲得し、関連する分野において自ら問題を解決する能力を身につけられるようにする。」となっており、「特別研究」よりも先に履修することが前提となっている。

以上のことから、下記の通りに履修することを申し合わせ事項とする。

- ・研究室配属されていることを履修の条件とし、かつ、「特別研究」よりも先に履修すること。つまり、「特別研究」を履修するのと同じ年度や、履修した次の年度以降には履修できないものとする。

ちなみに、旧カリキュラムでは「発展研究」は「特別研究」を履修した年度よりも後の年度に履修することを申し合わせ事項としている。

3.3 専門基礎研究の評価基準

先に述べたように、「専門基礎研究」では、「基礎的な研究テーマについて研究を進め」たうえで、「「特別研究」を実施するのに必要な専門的な知識を獲得し、関連する分野において自ら問題を解決する能力を身につけられるようにする。」となっており、「専門基礎研究」として単位認定されるかどうかは、そうした知識と能力が得られたと認められるかどうかによる。

具体的には、十分な研究成果が得られたうえで、それらを的確に報告書としてまとめ、発表会で発表を行い、質疑において適切に回答できなければならない。逆にいえば、実施内容が先行研究や関連研究のレビュー、システム開発、予備実験などのレベルに留まり、結果に対する検討や考察が不十分な場合には、「応用セミナー」としての単位認定は可能としても、「専門基礎研究」としては不合格とせざるをえない。

4. 報告書の提出と発表会

4.1 報告書の提出

研究成果は、指導教員による指導のもと、作成要領に従い、専門基礎研究報告書としてまとめ、期日までに提出しなければならない。作成した報告書は専門基礎研究について設定されたmanabaコースの「レポート」に提出すること。ファイル名などの詳細については別途指示に従うこと。

4.2 発表会

専門基礎研究の発表会は応用セミナーの発表会と併せて開催される。発表会の日時と発表形式については、別途定めているので、確認してそれに従うこと。専門基礎研究の可否は、発表会における研究成果の発表と質疑応答を踏まえて審査し、決定される。

5. まとめ

本文書では、専門基礎研究の報告書を作成し、発表を行う方法について解説した。本文書に書かれていないことについては別途定められた要領に従うとともに、もし不明確な点がある場合には、指導教員に確認し、指示を仰ぐことが重要である。